

飯島賢二の『恐縮ですが…一言コラム』

第 257 回 「男」と「女」～ 男はみんな、フェミニスト

2008. 5. 11

男性以上にバリバリと仕事をこなし、活躍する女性、見ていてすこぶる魅力的である。そんな女性を見て、「女にしておくのは勿体ない」、昔の人は平気でこんな差別用語を使っていた。くよくよと決断できない人を「女の腐ったみたい」なんてことを言ったりもした。「女心と秋の空」「女三人寄れば姦しい」「女賢しうて牛売り損ねる」…古来の諺にも、女性の例えは、はなはだ芳しくない。でも、不思議と洋の東西関係なく、「女」はいつもこの傾向にあった。そう、今の時代「差別・蔑視」と認定されること、明らかである。

しかし実態は、宗教にも、職業にも、歴然と差別がある。特にイスラム教は「男」と「女」は、風習、服装、戒律から明らかに差がある。キリスト教とユダヤ教。アダムとイブの創世記（旧約聖書）も悪いことをしたのはイブである。最近はそうでもないが、我国でも、酒造りの杜氏は、女性ではなれなかった。歌舞伎の世界は「女形」はいるが「女」はいない。前大阪知事の太田さんが挑んだが、結局大相撲の土俵にも上がれなかった。かつては神聖な祭事（神事）には、全く関れなかったこともあった。つまり女性は、古今東西常に、隷属的な劣位の役割を果たしてきた。

なぜ、これほどまでに女性が差別されてきたのだろうか？その大きな理由の一つが、生理的なものだといわれている。毎月繰り返される生理的現象を「不浄なこと」として捉え、忌み嫌ってきたのである。

だとすれば、何と矛盾した論理だろう。このことが人間として最高の使命であり、男には出来ない、種の起源とその繁栄を司る、最も崇高な機能である。

小生実は、自身フェミニストだと言いきっている一人である。女性に甘い男性という意味合いではなく、男性は本来、女性には絶対かなわないと信じている。

「男」はたぶん、幼少期を経過し物心ついてからは、殆んど進化しないのではないかとさえ、思っている。ところが女性は、基本的に毎月、どんな人でも「進化」している。生理的に進化するという事は、必ず、精神的に進化しているに違いないのだ。少なくとも、毎月「進化」するきっかけを持っているのが女性であり、男性はそのきっかけすら掴めないうまま、平々凡々と過ごしてしまっているのかもしれない。

女性の永年の「進化」の体感は、恐らく一生涯体に身についている。それが長命の「源」であるのかもしれない。

女性のいつでもの性交受容性、乳房や臀部の発達、そしてオルガスムの獲得が、配偶者間のつながりを強固にしたというのは、男性支配のイデオロギーだという。キーワードは「排卵の隠蔽」である。そして、排卵の隠蔽は、女性が男性支配をするための進化だったという。

妊娠の可能性がない時期にも、性交をする女性の資質は、男性の子孫を男性に確定させない。いつ妊娠したかは、男性には判らないし、女性にすら自覚できない。これこそ実は、女性が男性支配をするための進化だったと云われている。排卵が隠蔽されても、女性は自分の子供を自覚できるが、男性は自分の子供さえ確定できない。だから、男性が女性に権威をふるえるように、文化、政治など、さまざまな領域で男性優位を主張した。この論にしたがえば、女性の生物的な進化に対して、男性は文化的に対抗したことになる。

つまり排卵の隠蔽によって、自分の種を残したい男性にとっては、常時の性交が不可避となった。種の保存において、排卵の隠蔽が、女性の主導権を確保させた。自分の種を確保したい男性は、そのためにさまざまな文化装置をつくって、女性に対抗せざるを得なかった。

その対抗力を持つために男性は、継続的な努力を繰り返せざるを得ないこととなる。もちろん女性も同じだが、女性は「進化」するきっかけを共有しているが、男性はそれが無い。その点、男性の継続的な努力は、女性の比ではなくなる。

何とか女性に迫り着き、いや、それを凌駕するには、女性の数倍のパワーをかけないと「進化」できないのだろう。

恐らくそれが、「男」の「性」なのかもしれない。その原始的根底には女性に対する「嫉妬」がある。身体を鍛え力を付けるのも、仕事を通して所得を得るのも、偉そうに威張り、威嚇するのも、全て女性に対する嫉妬心の現れである。文化も、宗教も、あるいは教育さえも、その証を残しておきたい「男」主導の「パラドックス」なのかもしれない。

だとすれば、嫉妬はたぶん尊敬、あるいは崇拜。そう、「男」はたぶん、皆、フェミニストに違いない。

参考 サラ・ブラッファァー・フルディ著『女性は進化しなかったか』
思索社 1982年刊